

令和3年度 かほく市立外日角小学校 学校最終評価報告書

		自己評価					学校関係者評価	後期に向けて (改善計画等)
	重点目標	具体的取組	評価の観点	達成度判断基準	取組状況	達成度	学校関係者評価者による意見	
1	小中連携した確かな学力の育成	①意欲を高める指導や、ねらいにせまる発問を工夫し、表現する場を設ける。	【満足度指標】 発問の工夫をしたり、学び合い、表現する場の設定をしたりしている。	一日の授業で、 A:2時限以上どちらかできている B:2時限はどちらかできている C:1時限はどちらかできている D:ほとんどできていない	「やってみたい」「考えたい」という学習意欲が弱い。基礎基本の定着には個人差が大きく、自分の意見をもつことが難しかったり、自信をもてなかったりする児童も見られる。	A	・児童の表現力を高めるといふ課題について、自分の思いを言語化させるという作業は難しいが、私たち周囲の大人も「ひとりよがり」ではなく、「どう伝えたか」より「どう伝わったか」、「説得」より「納得」させることを大切に児童と関わっていく必要があると感じた。 ・児童アンケートから計画的に物事を進める能力と、コミュニケーション能力の不足があるのではないかと思われる。物事や行動の理由付けを大人側がうまく説明できていないのかもしれない。保護者としての課題とも思われる。	・研究授業では、先輩方の授業を見て自分の授業に生かすよいきっかけになった。授業構想シートは、書くことで本時のねらいや児童に何を表現させればよいかなどを明確にしていきたい。 ・学習部の提案がかなり精選され、2学期は「聴く」、3学期は「話す」と一つに絞った目標が分かりやすく、指導もしやすかった。 ・算数では、かさ・長さの単元学習などで、操作活動を繰り返し行い、実感を伴って学習できるとよい。 ・楽しんで活動できている児童がほとんどである。その一方で意欲が低い児童がいるため、どの児童も楽しく参加できる活動を工夫する。
		②漢字力や計算力等基礎学力の向上を図る。	【成果指標】 漢字および計算の評価プリントの85%を習得している。	漢字や計算の定着度(学級平均)が A:90%以上である B:70%以上である C:50%以上である D:50%未満である	漢字、基本的な計算の定着に努め、向上は見られるが、学年に応じた基礎基本の力が不十分な児童もいる。定着度(学級平均)が、70%以上90%未満の学級がほとんどという状況である。	B		
		③家庭学習の定着・習慣化を図る。	【成果指標】 宿題の提出率が90%以上である。	A:90%以上の児童ができる B:70%以上の児童ができる C:50%以上の児童ができる D:50%未満の児童ができる	学年に応じた家庭学習の指導の継続により、宿題の提出率はよくなってきている。個別指導が必要な児童は複数いる。	A		
		④外国語教育の指導の充実に努める。	【努力指標】 コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確にした言語活動を設定することで、児童の意欲を高める。	「外国語でコミュニケーションを図ることは楽しいですか」に対して、「そう思う」と答えた児童が A:80%以上いる B:70%以上いる C:50%以上いる D:50%未満いる	楽しみながら外国語に親しんでいる児童もいるが、外国語への苦手意識をもっていたり自信がなくてしっかり発音できなかったりする児童もいる。	A		

2	学校図書館を活用した学習活動の推進とICT	①学校や家で読書する習慣を身に付ける。	【成果指標】 週に1回図書館を利用する児童が80%以上である。	A:80%以上の児童がいる B:70%以上の児童がいる C:60%以上の児童がいる D:50%以上の児童がいる	低学年は、図書館に楽しんで通う姿が見られるが、高学年になると進んで読書をする児童が少なくなる傾向がある。	A	・「学校へ行くのは楽しいか」「授業は分かりますか」「学校や家で読書をしていますか」などの答えとして、「そう思う」が昨年よりも減少傾向にあるのは、コロナ禍においては、社会全体が息苦しさや感染対策で疲弊している影響が児童にも伝わっているのかもしれないと感じた。	・より楽しくのびのびと活動できるようになるツールとして、図書館の本やクロムブックを活用するなど、レパトリーを増やしていく。その中で関わる場面や協力する場面が増えるような工夫を取り入れていく。
		②児童の主体的、対話的で深い学びを実現するために、ICT機器を積極的に活用する。	【努力指標】 問題解決のためのツールとして活用できるよう、系統的な指導の機会を確保する。	A:よくあてはまる B:おおむねあてはまる C:どちらかといえばあてはまらない D:あてはまらない	授業のねらいを達成するための、ICT端末・機器の効果的な活用は、これからの段階である。	B		
3	いじめ・不登校への適切な対応と幼小接続の推進	①児童理解をもとに学校が楽しいと言える人間関係づくりに努める。	【満足度指標】 児童が学校が楽しいと感じている。	「学校は楽しいですか(楽しいと言っている)」に対して、AもしくはBと答えた児童・保護者が A:90%以上いる B:85%以上いる C:70%以上いる D:70%未満いる	自己肯定感が低く、学校が楽しくないと感じている児童が15%いる。	B	・育った環境が違うので、学校の中だけの関わりで内面を変えるのは難しいと感じるが、1日の大半を同年代の集団で過ごす学校は、やはり大きな成長の場だと思う。諦めず、粘り強く関わってほしい。 ・見守り世帯への寒中見舞いはありがたい。直接手渡すと笑顔で受け取ってくれた。	・コロナの影響もあったが、企画委員会などがあいさつの取組を頑張っている。特活部とも協議しながら、児童主体のあいさつに関する取組ができるようにしたい。 ・来年度からは、3学期のように終礼の時間を使って児童理解の会を行い、年度初めや年度末はこれまで同様、児童の顔も見ながら全体で確実に情報共有できるようにする。 ・いいねカードの取組は、来年度も継続するが、これまで同様年間を通して取り組むか、行事などに合わせて取り組む時期を決めて全校で書くなど、効果的な方法を検討する。
		②いじめは絶対につけないという意識を育てる。	【成果指標】 児童が「いじめはどんな理由があってもいけない」と感じている。	「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、「そう思う」と答えた児童が A:95%以上いる B:90%以上いる C:80%以上いる D:80%未満いる	「いじめは絶対につけない」とは思っていない児童が1%いる。	A		
		③職員・こども園・外部機関と連携し特別支援教育を充実させる。	【努力指標】 児童理解の会や学年会、終礼等で、児童の実態把握や問題の早期対応に努める。また、必要に応じて外部機関とも連携する。	A:よくあてはまる B:おおむねあてはまる C:どちらかといえばあてはまらない D:あてはまらない	個別に支援を必要としている児童が全体の10%以上いるが、専門相談員やスクールカウンセラー等と連携し、特別支援教育校内委員会を開催して、実態把握と改善策の共有に努めてきた。	A		
		④集団の中で協力する心や他を思いやる心を育てる。	【努力指標】 なかよしグループ活動に協力して活動しようとしている。	A:よくあてはまる B:おおむねあてはまる C:どちらかといえばあてはまらない D:あてはまらない	なかよしグループ活動には、高学年が低学年を楽しませる計画を考え、お世話をする姿がみられようになってきた。	B		

4	児童生徒の体力、運動能力の向上と食育の推進	①体力・運動能力調査結果を踏まえ、体力の向上に努める。	【成果指標】マラソンやなわとびチャレンジカード等に意欲的に取り組み、体力・運動能力の向上が見られる。	A:90%以上いる B:70%以上いる C:50%以上いる D:50%未満いる	休憩時間に体を動かしている児童は多いが、運動能力調査の結果に反映されるまでには至っていない。また、運動を好まない児童もいる。	B	・新型コロナ感染拡大防止のため、現場の心中を察し感謝する。 ・コロナ感染予防で、手洗いやマスク等の着用等の基本の上に、食事、運動、体を冷やさない、笑うことを通して免疫力向上も図ってほしい。	・健康観察時に就寝時刻を守ることができた児童に挙手させるなどして、さらに意識化を図る。 ・睡眠の大切さを、学活や保健の授業で指導するとともに、児童の実態を保護者に伝え、遅く寝る原因の一つと考えられるメディアとの関わり方について、保護者が見直すきっかけとなるようにする。 ・長時間使用することの危険性や、本校の児童の実態を保護者にも伝え、家庭と連携して正しく使用できるようにしていく。
		②規則正しい生活の確立をめざし、「早寝・早起き・朝ごはん」に取り組む。	【成果指標】早寝・早起き・朝ごはんが習慣化している。	A:90%以上いる B:70%以上いる C:50%以上いる D:50%未満いる	「朝ごはん」については、ほとんどの児童が習慣化している。「早寝・早起き」については、昨年度よりやや改善しているが、20.8%の児童が、あまり身についていないと回答していることが課題である。	B		
		③メディアコントロール週間やノーメディアデーの取組を通し、基本的生活習慣の定着を図る。	【成果指数】長時間メディアと関わることの危険性を理解し、メディアとの付き合い方をコントロールできる。	平日にラインや動画視聴など、インターネットを利用する時間が1時間未満と答えた児童が A:80%以上いる B:70%以上いる C:50%以上いる D:50%未満いる	平日に、ラインや動画視聴などのインターネットと関わる時間が多い。そのために就寝時刻が遅くなり、生活リズムが乱れる児童が少なくなっている。	B		
5	教職員の働き方改革の徹底	①教職員の勤務時間の管理意識を高める	【成果指数】一人あたりの平均時間外勤務時間が前年度比で5%以上減っている。	A:10%以上減っている B:5%以上減っている C:3%以上減っている D:減っている時間が3%未満	啓発により、超過勤務はやむをえないという意識はなくなりつつある。さらにワークライフバランスや適正な勤務時間の実現を目指し、校務分掌の適正化を進めたい。	B	・教職員の学校評価では、働き方改革において、まずは先生方一人一人の意識を変えていこうという取組がなされているように、具体的な意識付けや取組が多く書かれているのが印象的だ。 ・あまり数値にこだわらず、日々子ども達の様子を注意しながら見て、先生が感じたこと気になることを子ども達とよく話しかけることが大切かと思う。	・事故やトラブルの未然防止を図ることで対応の時間を削減したり、研修後はそのまま帰宅したりするなどのアイデアが多く出されるようになった。その中から全体で取り組むことができるものと、個人での取組とを合わせて実践していきたい。
		②学校業務を見直し、会議のペーパーレス化と、要点を絞った提案による適切な時間設定を通して、業務の効率化を図る。	【満足度指標】会議のあり方を見直しによって、教材研究や、子どもと向き合う時間の確保につながっている。	A:よくあてはまる B:おおむねあてはまる C:どちらかといえばあてはまらない D:あてはまらない	資料の印刷、丁合、配付等、会議の準備に時間がかかり、負担もあつたが解消した。しかし、校務部会等、一部の会議では、会議自体が長時間に及ぶことがあり、要点化、効率化、内容の精選が課題となっている。	B		